

クリフォード・ギアツ

『ヌガラ』

—— 19世紀バリの劇場国家』

小泉潤二（訳）、みすず書房、1990

Clifford Geertz. 1980. *Negara: The Theatre State in Nineteenth-Century Bali*.
New Jersey: Princeton University Press.

ギアツと劇場国家論

本書は、東南アジア地域研究に限らず文化人類学においても古典としての地位を確立している名著である。本書は19世紀のバリを舞台に、それまで前提とされてきた国家観に新たな視点を提起した挑戦的な著作だった。しかし、挑戦的な著作の例にもれず、現在まで東南アジア研究者や文化人類学者からの厳しい批判を受けてきた。

著者のクリフォード・ギアツ（Clifford Geertz）は、1960年代から1990年代にかけて活躍したアメリカ人の人類学者である。ギアツは、ハーバード大学社会関係学科で社会人類学を学んだ。1952年から1954年、彼は、マサチューセッツ工科大学のプロジェクトに参加し、ジャワでの調査を開始した。1956年、ギアツはジャワの宗教に関する論文で博士号を取得した。その後、博士論文は『ジャワの宗教』（1960）として出版された。さ

らに、彼は1957年から1958年までバリでの調査を行った。ジャワやバリの調査からは、数々の重要な研究成果が生み出された。ジャワに関しては、『ジャワの宗教』『インボリューション—内に向かう発展』(1963)、バリに関しては、「ディープ・プレー—バリの鬩鷄に関する覚え書き」(1972)、ヒルドレッド・ギアツ(Hildred Geertz)との共著『バリの親族体系』(1975)、そして本書があげられる。1970年にプリンストン高等研究所に籍を移して以降は、文化人類学の理論に関する著作を数多く残した。

そうした著作の中で本書は、ギアツのインドネシアにおける民族誌的な調査研究の集大成として位置づけることができる。本書には模範的中央、地位沈降のパターンそして劇場国家などの重要概念が登場するが、これらの概念の萌芽は「文化体系としてのイデオロギー」(1964)や『二つのイスラーム社会—モロッコとインドネシア』(1968)など、本書以前の著作に見ることができる。ギアツは、『二つのイスラーム社会』において、ジャワのマジャパヒト王国だけでなくスカルノ大統領による独立記念塔やモスクの建設そしてスポーツ競技大会の開催などの国家事業を劇場国家の再現であると指摘している。劇場国家論は、当初から19世紀のバリに限らず、現代政治にも適用可能な概念として構想されていたのである。

東南アジアの国家論

本書は、それに先行する東南アジアの王権論の影響を受けている⁽¹⁾。重要な東南アジアの王権論としては、R・ハイネゲルデン(Robert von Heine-Geldern)の「東南アジアにおける国家と王権の概念」(1942)、「ジャワ文化における権力観」(1970)およびS・J・タンバイア(Stanley Jeyaraja Tambiah)の『世界征服者と世界放擲者』(1976)があげられる。R・ハイネゲルデン

(1) 劇場国家と銀河系政体を含む東南アジア王権論に関しては、関本(1987)や永瀧(2007)の詳細な要約がある。

は、東南アジアのインド化した王国の王都や王宮などの中央は王国全体の縮図であり、中央が須弥山を軸としたインド的宇宙観を模写していることを指摘した。ギアツは、この「中央＝インド的小宇宙」という図式をさらに発展させた。ギアツは、4世紀から15世紀の東南アジアのインド的国家の中央を、「超自然的秩序の小宇宙」「政治秩序の有形的具象」である模範的中央として再定義し、インド的国家は模範的中央を舞台装置とした儀礼を統治の内実とする劇場国家であると指摘した。

他方、S・J・タンバイアは、タイの国家形成を論じた『世界征服者と世界放擲者』(1976)の中で、模範的中央や劇場国家の静的な国家観を批判し、それらの背後で展開される政治過程まで射程に収めた銀河系政体論を提起した。劇場国家が、模範的中央を頂点としたピラミッド型の国家像を前提としている一方、銀河系政体は、同型の型が同心円状に反復する曼荼羅の図像を前提としている(関本1987; 永淵2007)。東南アジア大陸部では、有力な中心的クニの周囲を、中央と同型の従属的クニが曼荼羅の図像のように取り囲んでいた。各クニは自律性を保っていたものの、婚姻連帯、役人の派遣、朝貢関係、軍事的支持や儀礼的奉仕などの紐帯によって結ばれており、従属的クニは有力な中心的クニの影響圏に引き寄せられた。各クニの影響圏は戦争、権力闘争や反乱によって絶えず伸縮したものの、クニ同士の均衡を統制する政治機構は存在しなかった。各クニが影響圏を伸縮させることで、クニの布置は銀河系のように絶えず変化した。銀河系政体論は、同型反復的なクニの絶えず伸縮する影響圏によって流動する動態的な国家観を提示した。

19世紀バリの劇場国家

ギアツは、タンバイアが銀河系政体論を提唱した4年後、本書を出版した。本書を読むうえで重要な点は、ギアツが、劇場国家は「民族誌学的アプローチ」による「古典期東南アジアにみられたインド的国家群の、(中

略) 一種の社会学的青写真である」と前置きしている点である。つまり、本書の目的は、古典期インド的国家群の理念型を提起することにあつた。

本書は、上流階級と村落の政治に関する前半部と、王宮儀礼に関する後半部の二部に分けることができる。前半部では、劇場国家が上流階級と農民階級の相互に独立した政体から構成されていたことが論じられる。上流階級の政治の本質は、地位と威信をめぐる競争だった。そして、この競争を規定していたのは地位沈降のパターンだった。バリ人たちの間では、始原こそが模範的な姿とされており、現在とは始原から逸脱した姿であるとされていた。始原からの遠近は、神々から現在に至る系譜によって測られた。始原から系譜が下降するほど、始原の神々の直系から傍系へ遠ざかるほど、地位は低下した。他方、村落における農民階級の生活は、上流階級の政治から分離していた。村落世界は、共同生活の単位である部落、灌漑を管理する水利組合、儀礼に関わる儀礼組織など、上流階級とは無縁な集団によって維持されていた。劇場国家は「中央集権的国家装置」を欠いており、上流階級と農民階級は、役人や徴税人たちを媒介とした緩やかな政治的紐帯によって結びついていただけだった。この緩やかな政治的紐帯によって構成された劇場国家とは、「頂点が一番不安定となっているトランプの家」だった。

不安定な国家の頂点で求心力を発揮したのは、王や君主たちが主宰した壮麗な儀礼だった。王や君主たちが儀礼によって目指したのは、儀礼の演劇が顕示する威厳さや鮮烈さによって模範となる始原の状態を現実化することだった。大規模な王宮儀礼は、「王と君主が興行主、僧侶が監督、農民が脇役と舞台装置係と観客であるような」一大集団演劇だった。この集団演劇の騒乱と熱狂によって、王宮の装飾、区画配置や神器などの舞台装置、そして中心に鎮座する王は象徴としての表現力を獲得した。これら象徴群が現実化したのは、政治的秩序の模範としてのインドの宇宙と宇宙の真理としての位階制である。

インド的宇宙と位階制の中で、王や君主たちは神の活性化した姿となり、聖なる偶像に変貌した。そして、王や君主たちが完璧な神の似姿に接近するほど、中央は模範的になり、国家は現実化した。王や君主たちは、集団儀礼が現実化する模範的秩序によって、自律的な村落や不安定な政治的紐帯を修正しようとした。「中央集権的国家装置」を持たない劇場国家の王や君主たちは、統治を目的としたのではなかった。むしろ、劇場国家と村落を結ぶ政治的紐帯は、儀礼のために人員や物資を動員する仕掛けであり、国家を現実化する集団演劇上演こそが王や君主たちの目的だった。

権力論としての『ヌガラ』

出版以降本書には数多くの批判が寄せられた。批判が集中した点は、ギアツが文化的側面を国家の側に、実際の権力関係を村落の側に分離している点や、劇場国家における政治の流動性を描いていない点である（関本 1987; 永淵 2007）。多くの論者が指摘してきたように、国家論としては、銀河系政体論の方が、具体的な政治の動態にまで射程に据えたより優れたモデルである。

では、ギアツが本書で提示した論点はすでに語りつくされたのであろうか。ギアツが銀河系政体論の後に本書を出版したことを考慮するならば、銀河系政体論では十分に論じられなかった点を論じることに、本書執筆の目的があっただろう。

ギアツは本書の最後を、西洋を起源とする古典的な権力観の批判に当てている。ギアツによれば、16世紀以降の西洋の国家観では、権力とは支配を目的として人々を「強制する力」であるとされ、儀礼は権力を正統化・合法化する道具や仕掛けとして外在化されてきた。古典的な権力観における国家儀礼は「力を誇張し、権威を称揚し、あるいは手続きを合法化」したが、「なにかを現実化することだけは」しなかった。

たしかに、「強制する力」として権力を捉える視点は現在まで継承さ

れている。他方、ギアツと同時代に活躍していたM・フーコー（Michel Foucault）も、マキャベリ以来の古典的な権力観の再検討を行っていた。フーコーが論じたように、西洋においても権力は主権権力、規律訓練権力や生権力（司牧権力）などの複数のタイプに類型化できる。劇場国家の儀礼の「顕示や栄誉や演劇」は、人々を「強制する力」ではなく、模範的な秩序や「真理」を「構成する力」であるという点で、フーコーの権力観と類似している（cf. 大澤 2019）。

バリの王や君主たちが華麗な儀礼を主宰することで行使したのは、人々を「強制する力」というよりは、模範としてのインダの宇宙や宇宙の真理である位階制を「構成する力」である。劇場国家における儀礼の目的は、模範としての宇宙や位階制を現実化することであり、この目的を達成する手段こそが儀礼だった。そして、儀礼の上演とインダの宇宙や位階制の現実化が表裏一体の関係にあるとするならば、この権力から正統性やイデオロギーだけを分離することはできない。むしろ、華麗な儀礼の上演自体を「構成する力」として捉えない限り、儀礼は、権力を正統化・合法化するための道具や仕掛けに還元されてしまう。

本書は、多様な読み方や思考を触発する刺激的で挑発的な作品である。ギアツ自身も日本語版への序文の中で、本書を「発見の導きとなるべき著作であった」と述懐している。本書には語りつくされていない論点はまだ数多くあるはずであり、インダの国家の古典的な権力論としての読み方も、その中の一つであろう。

参考・関連文献

- ベネディクト・アンダーソン. 中島成久（訳）. 1995. 「ジャワ文化における権力観」『言葉と権力—インドネシアの政治文化探求』日本エディターズスクール出版部.
（原著：B. R. O' G. Anderson. 1972. *The Idea of Power in Javanese Culture*. In C. Holt ed. *Culture and Politics in Indonesia*. Ithaca NY: Cornell University Press.）
- クリフォード・ギアツ. 林武（訳）. 1973. 『二つのイスラーム社会—モロッコとイ

- インドネシア』(岩波新書)岩波書店。(原著: Clifford Geertz. 1968. *Islam Observed: Religious Development in Morocco and Indonesia*. New Haven: Yale University Press.)
- 吉田禎吾・鏡味治也(訳). 1989. 『バリの親族体系』みすず書房。(原著: Clifford Geertz. 1975. *Kinship in Bali*. Chicago and London: University of Chicago Press.)
- 池本幸生(訳). 2001. 『インボリユーション—内に向かう発展』NTT出版。(原著: Clifford Geertz. 1963. *Agricultural Involution: The Process of Ecological Change in Indonesia*. Berkeley: University of California Press.)
- 関本照夫. 1987. 「東南アジアの王権の構造」『現代の社会人類学 3 (国家と文明への過程)』伊藤亜人ほか(編), 東京大学出版会.
- ミシェル・フーコー, 高桑和巳(訳). 2007. 『ミシェル・フーコー講義集成 <7> 安全・領土・人口』筑摩書房。(原著: Michel Foucault 2004. “Sécurité, Territoire, Population.” In Michel Senellart ed. *Cours au Collège de France 1977-1978*. Paris: Seuil/Gallimard.)
- 永渕康之. 2007. 『バリ・宗教・国家—ヒンドゥーの制度化をたどる』青土社.
- 大澤真幸. 2019. 『社会学史』(講談社現代新書)講談社.
- ロバート・ハイネ＝ゲルデルン, 大林太良(訳). 1972. 「東南アジアにおける国家と王権の概念」『神話・社会・世界観』大林太良(編), 角川書店。(原著: Robert von Heine-Geldern. 1942. *Conceptions of State and Kingship in Southeast Asia*. *The Far Eastern Quarterly*. 2(1): 15-30.)
- Tambiah, S. J. 1976. *World Conqueror and World Renouncer: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background*. Cambridge University Press.

❖本書の著者紹介(クリフォード・ギアツ)

アメリカの文化人類学者。象徴を通じて文化をテキストとして解釈する解釈人類学を提唱した。主な著作に『文化の解釈学』『文化の読み方／書き方』などがある。

❖執筆者紹介(西島 薫)

京都大学学際融合教育研究推進センター特定助教。専門はインドネシア地域研究, 文化人類学, 政治人類学。感銘を受けた本に, レヴィ＝ストローズ『今日のトーマティスム』。